

## 福岡県の主な農産物の生産状況

平成 30 年 11 月 15 日現在  
(専技情報より抜粋)

### ◇大豆（フクユタカ）◇

収穫は 11 月 10 日頃から開始され、最盛期は 11 月 18～28 日の見込みです（平年並～3 日遅い）。1 茎当たり莢数と粒数はやや多いですが、播種後の乾燥による苗立のバラツキと登熟前半の日照不足による粒の充実不足により、収量は昨年並み～やや多い見込みです。

青立ち株の発生は少ないですが、青立株や大型雑草は、汚粒発生や収穫の支障となるため、収穫前に必ず抜き取り、ほ場外へ持ち出しましょう。最下着莢高に留意しながら、収穫時に土をかき込まないように刈取り高さを調整して収穫し、倒伏しているほ場は、リフターキットを装着し、刈取りロスの軽減に努めましょう。

### ◇麦類◇

播種は 11 月 10 日頃から始まり、最盛期は 11 月下旬になる見込みです。大豆後の作型では、播種は 12 月上中旬が中心になる見込みです。

排水対策、土づくり、雑草対策を実施してから播種を行うとともに、早めに耕起（荒起し）せず、ほ場の土壌水分や天候を見極めて、適期播種を行いましょう。二条大麦の早播きは、収量、品質が低下しやすいため実施しないようにしましょう。

### ◇イチゴ◇

出荷は 11 月 5 日から開始。11 月 15 日現在、約半数の産地で出荷が行われ、全体では平年より 5～7 日程度遅いです。出荷量は 11 月下旬から増加する見込みです。出荷されている果実の果形は比較的良好で、食味も良好です。2 番花房の分化は平年並～やや遅いですが、1～2 番果房の間の葉数は 4～6 枚程度とやや少なく、大きな出荷の谷は生じない見込みです。

適正な草勢を維持するため、状況に応じた温度や電照管理、摘果などを徹底するとともに、高温傾向による乾燥に注意し、かん水管理を徹底しましょう。炭疽病が多発したほ場や親株が不足する場合は、秋ランナーを活用して親株を確保しましょう。

### ◇施設キュウリ◇

抑制作型の出荷は、11 月下旬から徐々に減少し 12 月で終了する見込みです。コナジラミ類がやや多く、天敵を導入していない一部のハウスでアザミウマ類が多発しています。促成作型の定植は 10 月中旬が中心です。生育は概ね順調ですが、一部で低温管理による伸長抑制が見られます。出荷は 11 月中旬から本格的に開始しています。うどんこ病が発生し始めており、一部でアザミウマ類が発生していますが、全体的に病害虫の発生は少ない傾向です。

急な低温に備え、加温準備を行うとともに、ハウスの密閉度を高め、併せて被覆の多層化によりハウスの保温性を向上させ、草勢を見ながら摘心、摘葉を行いましょ。また、病害虫の防除対策を徹底しましょ。

#### ◇カキ◇

「秋王」の出荷は、10月中旬から開始しました。汚損果の発生は昨年より発生が少ないですが、台風等による傷果が多いです。「富有」の出荷は、11月上旬から開始しました。着果量は平年より多いですが、夏場の乾燥による小玉化、ヘタスキやカイガラムシの多発による軟熟果の発生で、出荷量は前年を下回る見込みです。

適期収穫に努めるとともに、軟熟果の混入防止のため選果を徹底し、炭疽病の罹病枝・被害果の除去、園外への持ち出しを徹底しましょ。

#### ◇キウイフルーツ◇

「レインボーレッド」は、出荷終了しました。かいよう病等の発生や高温乾燥による樹勢低下の影響で出荷量が前年比5割程度に減少してしまします。「甘うい」は、10月22日で集荷終了し、10月29日～11月15日で選果予定。11月15日現在の果実品質は、糖度は前年よりやや高く、階級はやや大きく、集荷量は123t（前年比121）です。「ハイワード」は、11月上旬から集荷開始しました。果実肥大は、9月以降定期的な降雨によりやや回復し、集荷量は前年よりやや少ない見込みです。

果実が濡れると腐敗しやすくなるため雨天日には収穫せず、収穫果実は温度が上がらないように日陰に置きましょ。収穫後の落葉期にかいよう病の対策を徹底しましょ。

#### ◇トルコギキョウ◇

秋出荷作型（10～12月）が出荷中です。10月中旬以降の日照時間に恵まれたことから、生育障害の発生はなく、安定した出荷となりました。販売単価は、台風の影響の品薄感により例年以上に高いです。11月も日照時間は長く、花芽の発達は良好で気温も確保できており、順調な出荷が続く見込みです。

11月出荷分は、最低温度15℃を確保し開花を促進させましょ。日中は換気に努め茎葉の締まった株づくりを行うとともに、斑点病、灰色かび病の対策を徹底しましょ。

#### ◇豚、鶏◇

10月の豚枝肉価格は、全国的に出荷頭数が増加し、例年通り下降期に入り、前年、過去5年平均を下回る水準です。鶏卵価格は、供給量が増加基調で推移し、過去5年平均を下回る水準です。

寒冷期を迎え、鳥インフルエンザや豚コレラ発生予防のため、農場の衛生管理を徹底しましょ。